

地域の文化

特集『文化の秋』



支える文化の人たち



「文化の日」に際して、今年も編集委員会
地域の文化的活動を支援して下さっている3人
の方にお話を伺いました。

この特集は今年で5回目となり、これまで各
分野15人の方々を紹介させていただきました。
みなさまへの感謝と一層のご活躍を祈念申し
上げます

伊藤清四郎さん



現代尺八に魅せられて

尺八は一般的には真竹で作られていて、標準的な長さが一尺八寸(約54cm)で「尺八」と呼ばれています。日本には奈良時代、雅楽の楽器として伝えられたと言われています。伊藤さんが尺八に出合ったのは昭和55年、34歳のとき。しばらくは、テレビの尺八講座を視聴しながら独学で学んでいましたが、邦

赤田愛子さん



いけばなとは、

花を生かす瞬間の生きる喜び

いけばな教室のお稽古が西交流センターであった日、お稽古を見学させてもらいました。秋らしい花材が用意され、先生は黒板に『重陽』と書き、「今日は重陽の節句に当たり、菊は長命を表します」と四季の行事をさり気なく

萩原弘さん



笑は明日へのエネルギー

街の人気者「ふじみの寅さん」こと萩原弘さん(88歳)は、鶴瀬生まれ鶴瀬育ち、地元

の生き字引とも言えます。向学心が強く人生のすべてにおいて挑戦的で、その経歴は編集印刷・カメラマン(報道)・

楽や民謡が中心だったので、どうもしつくりこなかったそう。そんなとき、新宿のライブハウスで、現代尺八奏者の第一人者である村岡実先生の演奏に出会い感銘を受けられました。それ以来ずっと村岡先生に師事されてきたとのこと。そして昭和60年、鶴瀬西公民館時代に「現代尺八むらいき会」を立ち上げました。当初からのメンバーはほとんどいなくなってしまうましたが、今も代表として指導者として活動されています。

現代尺八の魅力は、古典曲に留まらず、あらゆる曲にチャレンジし、いろいろな奏法を取り入れて和洋楽器とコラボできること。「ギターフレンズ」指導者の中嶋美奈子さんとは20年来のコンビを組んで演奏活動をされています。都内では、洋楽器とバンドを組み、川越では尺八ユニットも結成しています。コロナ禍でできなかった演奏活動が徐々に動き

説明されました。そして、その日の午後正式にお話しを伺いました。

いけばなを始めたのは、子どもがある程度成長し、同じ生活をしていては今度は自分が成長しない。何か長く出来ることを見つけようと考えたそうです。近くにいけばなの先生がいたこと、その方が高校時代に部活で習った『池坊』の教授であったことから華道の道へ進まれました。部活動時は稽古を休んだりしたそうですが、稽古は休まないと決め、実行されました。聞き手には耳の痛いお言葉でした。華道歴は46年にもなりますが、30年前から京都の池坊本部に年に4回通われ、研鑽を積みまれています。錚々たる肩書をお持ちなのもうなずけます。先生は現在、水曜学級を27年前から、伝統文化子どもいけばな教室を17年前から、関沢キッズクラブでは花一輪を楽

華道(古流師範)・トリアスロン(三種競技)・鉄人競技)・楽器演奏(ギター、ドラム)・大道芸・地域活性化を目指して「繁盛研究会」を立ち上げるなど、驚くほどに多様多才。

「会社勤めを辞めて39歳で独立し、『エース工芸株式会社』を創業。高額のMac製のコンピュータ等を導入して、写真植字や製版・印刷などを受注し繁忙でした。70歳過ぎに事業を閉じ、ボケ防止にと始めたのが『寿限無』『ガマの油売り』『寅さん』などの口上。ギターは既に取得していましたが、本格的に演奏に取り組んだのは70代に入ってから。某イベントの楽器挫折者救済合宿講習会に参加し、若者ばかりの中に高齢者は私が1人だけでした。これが注目されテレビの特番『ギター70歳の挑戦』に出演する羽目になりました」と

始めていると、嬉しそうに話してくださいました。

宮城県生まれの伊藤さん、東日本震災のときは仲間と復興支援の演奏活動に出かけました。福祉施設や小中学校の邦楽体験教室などにもボランティアとして積極的に参加しています。小中学校に行くときには、全員分の尺八を水道管で作って持参していて、少しでも若い人に触れてもらい、興味を持ってくれることを願っているとのこと。年を重ねると息が続かないことも出てきますが、とにかく毎日練習あるのみと、ご自分を厳しく律していることが伺えました。(西角)



しむことを伝えたいと活動しています。キラリなどのイベントに飾る作品を作ることもあります。その間、小学生は高校生になり、年配の方との別れもありました。

赤田先生からは、文章でこんな言葉をいただきました。「伝統文化のいけばなの魅力を多くの皆さまに知って頂き、長い伝統の上に花開いた美しさの輪が広がっていき、地域の皆さまに繋げていきたいと願っております。これからも日々研鑽を重ね、いけばなという伝統を楽しんでいきたいと思えます。いけばなと出会い、人々に恵まれ皆さまに支えられてここまで歩んでまいりました。感謝の一言です」(熊井)



話題は尽きません。

もともと器用な方で、上達すると人前で披露したくなるのが人情とあって、老人ホームや町会・交流センターなどから出演依頼の声がかり「みなさんに喜び楽しんでもらえるなら・・・」と快く引き受け、充実した日々をお過ごしです。

みなさまもご存知のとおり萩原さんは同好会「と素人大道芸一座」のメンバーで、鶴瀬西交流センター広報紙「つるせ西だより」の編集委員でもあります。(川上)

